

〔書評〕「マス／マス以前」のコミュニケーションの精神史

—John Durham Peters. *Speaking into the Air: A History of the Idea of Communication*—

温秋穎

一 はじめに

「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション・シオン」という英語が日本にはじめて入ったのは、一九四七年ごろだと思う。あつというまに「マス・コミュニケーション」という言葉が、「コミュニケーション・シオン」という言葉を追いこして、「マスコミ」というふうにみじかくされて、日常の日本語の中にくみこまれるようになった^(一)。

日本語における「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」という二つの言葉の使い分けに

ついて、鶴見俊輔は一九七三年に、以上のように書いたことがある。一九六〇年代後半から、コミュニケーションという研究分野が社会学者や批評家の注目を集め^(二)、「コミュニケーション史」という研究テーマが提起されていた。しかし、その後、「コミュニケーション史」がもつ外縁の広さのためか、有力な研究分野としては長く続かなかつたようである^(三)。

鶴見が言う「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」という二つのことばの分断は現在も続いており、同じコミュニケーションに関する近年の研究動向としても、コミュニケーション研究とマス・コミュニケーション研究の範囲は必ずしも重なっていない

ない。

二〇二二年に日本マス・コミュニケーション学会が「日本メディア学会」に学会名を変更する過程において、マス・コミュニケーション研究とメディア研究を回顧しつつ各研究の理論と領域を再考する討論が行われた^四。このようにメディア研究への注目が高まるなかで、事象としての、また、研究領域としての「マス・コミュニケーション」と「コミュニケーション」を分けて考えてみる良い機会であると思われる。

そのなかで、改めて注目すべき著作として、ジョン・ドラム・ピーターズ(John Durham Peters, 1958-)の『空に向かって語るーコミュニケーションの精神史』(*Speaking into the Air: A History of the Idea of Communication*, 1999)^五を挙げたい。本書は日本ではまだ多くは知られていないようであるが、海外では七つの言語に翻訳され、多くの大学のメディア研究の推薦図書とされており、今日のメディア史研究とメディア研究にも示唆を与えてくれる労作である。

ジョン・ドラム・ピーターズは、一九八六年からアイオワ大学で二〇年間コミュニケーション研究とメディア理論を教えた後、現在はイェール大学の「イギリス文学、映画、メディア研究」専攻で教鞭をとっている。二〇一五年に出版された『驚異の雲ー環境的なメディア哲学へ』(*Marvelous Clouds: Toward a Philosophy of Elemental Media*)では、人間の存在と技術、環境を融合するメディア哲学の構築を目指しており、注目を集めた。この『驚異の雲』に先立つ本書『空に向かって語る』においても、存在としてのメディアという発想の萌芽がある。

本稿は、『空に向かって語るーコミュニケーションの精神史』の内容を要約し、その思考の筋道や論理の運び方を抽出することを目的とする。本書が網羅する欧米の哲学史や文化史の専門知識は評者の専門の範囲を超えるものであるため、最後の総評では本書の研究の視座を確認しつつ、メディア研究において評価すべき点と、さらなる発展に関する問題点について初歩的な

まとめを行いたい。

なお、本文中のカッコで記すページ数は、二〇〇〇年出版されたシカゴ大学出版社による本書のペーパーバック版のものである。

二 本書の内容

イントロダクション コミュニケーションという問題

「コミュニケーションの精神史」というサブタイトルを取る本書は、コミュニケーションに対する逆説的な思考から始められている。現代人にとってコミュニケーションというのはしばしば、誤解がなく心が開かれた状態を指すユートピア的な概念として理解される。しかし、コミュニケーションの過程で起きる種々の困難は、技術の進歩によっても解決できなかった。発信者の意志と一致することなく、歪んだり誤ったりした伝達 (miscommunication)、言い換えれば、コミュニケーションの挫折ないし崩壊が随所で見られる。

「本書の目的として、コミュニケーションを考えた近代の思想を追及してコミュニケーションという近代的観念の起源をたどり、コミュニケーションに関する近代の経験はなぜしばしば行き詰まったように思われたのか、ということを考察する」(一頁)。コミュニケーションについて考えることは、自己と他者の痛ましい分離状態、私と公、内面的な世界と外に語ることばといった課題への思考にもつながるといふ。本書は二〇世紀に起きたコミュニケーション全般の問題を発掘するのではなく、ヴァルター・ベンヤミンが提起した「永遠なる現在」(nun stans)という手法を参照して、現在の状況に密接する歴史を回顧する方針を取っている(三頁)。

続いて序章において、「コミュニケーション」の概念を解説して、一九二〇年代と第二次大戦後のコミュニケーション理論を概観している。

まず、著者は歴史的に豊富な意味を持つ「コミュニケーション」ということばの意味の分岐を解説した。

「伝える」(impart)、「共有」(share)、「提携」(make

common)という意味をもつラテン語の「communicare」が、英語に入ったのは一四、一五世紀頃だった。その後、「コミュニケーション」ということばの意味は四つに分岐したという。第一は、共同体で行われた受信の行為としての「伝える」(impart)という意味であり、これが主として使われていた。第二は、「運搬」(transfer)あるいは「伝達」(transmission)の意味で、これは当初は物質的なものを運搬することを指していたが、後に思想や意味を伝達する意味も持つようになった。ただ、必ずしも発信側と受信側の相互的な作用を指すとは限らない。第三は、二回の運搬、すなわち「交換」(exchange)の意味であり、過去二世紀の間に目立つようになった。二つの端末をつなげることだけでも「交換」になるし、それ以上に両者の思想や心の出会いと融合がしばしば理想として語られていた。第四は、人間の存在と関わるさまざまな記号の相互作用を包括する意味であり、人間のあらゆる能力を表すギリシア語のロゴス(logos)

に近い。

本書において「コミュニケーション」の単数形を使う場合は、自己と他者を調和すること(reconciling self and other)という意味を表している(九頁)。象形文字、暦、印刷、郵便、電信、ラジオ、ケーブル、インターネットといったあらゆる「意味をもつメディアウム」は、「コミュニケーション」の複数形で表記する⁽²⁾。なお、本書評で記す「コミュニケーション」は、特記しなれば原文における「communication」の単数形の翻訳である。

一九世紀以降、コミュニケーション理論が誕生した前後の歴史は以下のように要約できる。一八八〇〜一八九〇年代までは、コミュニケーションは一つの明白な問題として意識されなかった。一九二〇年代には、コミュニケーションが哲学の領域で中心的な概念になり、社会思想、現代文学、芸術といった分野においても重要なアジェンダとして設定された。

一九二〇年代にあったコミュニケーションに対する

見方は、五つのパターンに分類できる。①コミュニケーションは、善あるいは悪のため、民衆を一つにして政治的な秩序を構築し、あるいはそれを破壊する力である。代表的な研究者として、政治学者のウォルター・リップマン、マルクス主義理論家のルカーチ・ジェルジュが挙げられる。②コミュニケーションは、言葉の意味論的な曖昧さを解消し、理性的な社会関係を構築する手段である。C・オグデン、I・リチャーズ『意味の意味』(The Meaning of Meaning, 1923)が代表的で、今日でもコミュニケーション理論のなかで最も有力な説である。③コミュニケーションは孤独な個人の超越できない障壁である。カフカ『城』(一九二六)やエリオット『荒地』(一九二二)といったモダニズムの文学や美学においてよく主題とされている。④ハイデガー『存在と時間』(一九二七)のなかのコミュニケーションは、個人が他者の他者性を知覚して開かれた状態である。ハイデガーと、その後継者であるサルトルやアレントは、いずれも情報交換の問題に興味を示さな

った。⑤ジョン・デューイによる実用主義な見方において、孤立する個人がコミュニケーションを通して、コミュニケーションに参加し行動の集結を行う。デューイによる実用主義のコミュニケーション論は、語用論と言語行為理論への関心を増幅させた。

著者は、一九二〇年代を後の時代につながる起点としている。しかし、対面のコミュニケーションと、マス・コミュニケーションとを区別する意識は、当時は欠乏していた。一九三〇年代になると状況が変わり、マス・メディアの社会的意義を主題として、社会調査の手法を用いる研究が盛んになった。しかしながら、「コミュニケーション」という意味合いが、「コミュニケーションズ」|| 「意味をもつメディアウム」からは脱落しはじめた。

一九四〇年代以降、コミュニケーションの理論の形が整えられていく。とくに第二次大戦後、知識人と公衆の関心が再び「コミュニケーション」に向かった。この関心は主に「情報理論」(information theory)と「治

療的なコミュニケーション論」(therapeutic discourse) という二種類の言説からなっている。

クロード・シャノンの『通信の数学的理論』(一九四八)に大いに刺戟されて、「情報」という概念は自立していき、コミュニケーションというのは情報の交換であるという認識が広まった。情報理論では、情報量を持つあらゆる事物がコミュニケーションの能力を有し、他の事物に影響すると考えられていた。通信の分野に限らず、生命科学や国際政治、人々の社会生活への指導にいたるまで、情報理論は大きな意味を持った。

ユネスコが成立して以降、ユネスコに参与していた研究者の間で、コミュニケーションがグローバルな啓蒙の手段として期待された。そのなかでも、人道主義的な心理学者のカール・ロジャーズが、治療的なコミュニケーション論の代表的な人物である。「精神療法の目的は、自分との、また他人との良いコミュニケーションを達成させることである」と彼は唱えた。このような癒しを求める反面には、コミュニケーションの失

敗への懸念があった。冷戦の影響を受けつつ、経済成長とテレビの普及を前にして、コミュニケーションの失敗は、孤独な個体、あるいは、操作された大衆を生み出しかねないとされたのである。ここで著者は、「情報理論」と「治療的なコミュニケーション論」の言説はアメリカの文化史に深く根を下ろしており、また両者とも、不完全な人間の交流が技術の発展によりきつと改善されるようになるかと信じていたと指摘している。

以上のように、「マス・コミュニケーション」の影響力が拡大した一九世紀以降のコミュニケーション理論の発展がまとめられている。しかし、人間がコミュニケーションの能力を有するという、一九世紀に起きた自己認識の変革がもたらした思想的かつ倫理的、政治的な意味は、まだ十分に跡付けられていないと著者は考えている(二頁)。とくに、技術の発展を手に入れても、コミュニケーションの失敗を依然として取り除けないのではないか。そうであれば、人間にとつてのコミュニケーションは何を意味しているのか。以下、本

書は「マス」が出現する以前の「コミュニケーション」について考察した人々の精神史を追っていく。

第二章 対話と散布

第一章では、欧米の道徳論のなかで二人の重要人物である、ソクラテスとイエス・キリストのコミュニケーションを観を考察する。欧米の道徳論と同じく、コミュニケーションの理論も、長らくこの対立する両者から影響を受けていたという。

(一) 『ハイドロス』のなかの「対話」

プラトンが綴った対話篇『ハイドロス』の内容の前半は、主に弁論家のハイドロスとリュシアスによる愛 (love) に対する見解であり、後半は書写と修辭字に関するソクラテスによる名高い批判である。著者は、『ハイドロス』の主題を「ことが置かれた状況と、愛の相互性 (mutuality)」とまとめている (四一頁)。
『ハイドロス』の前半では、エロス (eros) という個

に対するコミュニケーション、後半では修辭字という多数に対するコミュニケーションをそれぞれ扱っていたという。

同書に出てくる三つの演説のなかで、ソクラテスによる最後の一つが欧米の思想に巨大な影響を与え続けている。ソクラテスが説いた理想を受け継ぎ、ヘーゲルとマルクスは人間的な基本的な単位が二人であると信じた。また、キリスト教による批判的な継承を経て、今日でもコミュニケーションの尺度になっている。

最後の演説で、後にプラトニッククラブと呼ばれるコミュニケーション観が新しく誕生した。ここで、プラトンが綴ったソクラテスは、相互性のない関係として、書写という行為と相手を通貫する行為 (penetrate) とを否定していた。その反面、哲学を追求することは、知恵を愛する哲学の愛であり、哲学の恋人の二人が共に達成することである。このような一人の関係では、相手の身に自己の存在を見出すため、主体と客体の区別がなく、強制や操作といった一方通行の行為もない。

弁論術と書写に対するソクラテスの見解は、愛に對するものと共通した。良い演説は真理を説くと同時に、聞き手の立場にも配慮し、彼らの分かる範囲にあわせて適切な弁論術を使うべきだという。それに対して、書写は随意的な散布の行為であり、送り手と受け手の緊密な関係は達成できない。『パイドロス』において以下のように記されている。「言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く」、「あやまつて取りあつかわれたり、不当にののしられたりしたときには、いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする」⁷⁰。

著者は、書写を批判する以上の論点が、後に印刷術や写真、蓄音機、映画、ラジオ、テレビ、コンピュータが誕生した時代にも繰り返されたと指摘している。これらの批判は、パピルスに書くよりは、人間の魂に書くより生身の人間から教わるほうが永久的だと考えて

いたソクラテスの理想と共通しているのである。

このように、「パイドロスの偉大な美德は、メディアア批判の規範的根拠を驚くほど明確に綴り、さらに、メディアアとは何かを再考させることである」(四七頁)。

(二) 共観福音書のなかの「散布」

「散布」というコミュニケーションのモデルは、共観福音書⁷¹の二種類のたとえ話から明らかに取れる。まず、福音書で記述されたイエスは、海岸にひしめく聴衆に向けて、種をまく者 (sower) のたとえ話を説く流布者として登場した。種をまく者は、種をたくさん実らせるために、あらゆるところで種を播いていた。しかし多くの種は、鳥に食べられたり、旅行者に踏まれたりして、永遠に実を結ばないままである。わずかな種だけが、受容性のある土壌で育つて実を結んだ。イエスはこの話のしめくくりとして、「聞く耳のある者に聞いてもらおう(引用者訳)」と聴衆に説いた。

著者は、種をまく者のたとえ話 とくにイエスの最後の訴えは、共観福音書の読み手にも向けられており、二重のたとえ話になっていると指摘している。聞き手を選び、伝達の内容に慎重な『パイドロス』のなかのソクラテスとくらべれば、イエスは聞き手を選ぶことなく、広く教えを散布していたことがわかる。「キリスト教の伝統におけるいくつかの趣意によれば、散布というコミュニケーションのモデルは対話とは対等であり、場合によって対話よりも優れている」(五三頁)。

また、共観福音書のなかの別のたとえ話において、「相互利益を遅延させる」(the suspension of reciprocity)という主題が追求された。例えば、マタイによる福音書には、労働の量が異なるが報酬が同じであるというたとえ話があった。ソクラテスが論じた書写と読者の関係のように、個性が異なり、要求が異なる労働者に対して、雇い主が同じ方法で接している。また、ルカによる福音書のなかの失ったものに関するたとえ話では、ものを失った人とその周辺では、結果として何か

を浪費していたという傾向が見られるという。著者によれば、キリスト教の救済のテーマでは、浪費が中心的な主題とされており、イエスはその無駄を惜しまない。それに対して、ソクラテスは浪費を嫌悪する。キリスト教の伝統のなかの犠牲的非計算的な神からの愛すなわちアガペーは、しばしば「broadcast」⁽⁹⁾という言葉で表現されている(五五頁)。

ここで、本書が取り扱うコミュニケーションの精神史を俯瞰する二つのモデルである「対話」と「散布」が、対比させながら提示された。それと同時に、キリスト教の「散布」のモデルに近い著者の倫理的な立場も表明された。本書のタイトルである「空に向かって語る」(speaking into the air)の典故は、新約聖書の「コリント人への第一の手紙」の第十四章において、以下のように記されている。

もしあなたが異言ではっきりしない言葉を語れば、
どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、

空にむかって語っていることになる。世には多種多様の言葉があるだろうが、意味のないものは一つもない。(10)

この一文ではまず、コミュニケーションの過程で遭遇する困難ないしその崩壊の可能性を提示している。しかし、異言であつてもその異言を語ることが、美德とされているのである。「種まき」と「放送」という二つの意味合いが一つの単語となったように、「Broadcast」に代表される散布のモデルは、近代以降の多くの記録・伝達のメディアのコミュニケーションにも合致している。近代のメディアについては、後の第四章と第五章で詳しく論じている。

第二章 ある誤りの歴史―心霊主義の伝統

第二章以降は、一九世紀以降のコミュニケーションの精神史に焦点を当てている。一九世紀の後半になつてから、「コミュニケーション」という言葉に初めて

非物質的な接触という意味が付与された。この時期に生まれた想像と思想の根源が、早期のキリスト教と、ジョン・ロックが代表するイギリスの経験主義、一九世紀に生まれた各種の心霊主義の活動のなかで考察されている。

まず、ヨハネによる福音書において、精神と身体の不釣り合いにより生じた対話の失敗が多く見られる。早期のキリスト教において、人を愛することは、その人の心に非物理的な方法で接近することだと考える伝統があるという。この伝統のなかで、西ローマ帝国時代の神学者・哲学者の聖アウレリウス・アウグスティヌス (Aurelius Augustinus) が、人間同士の間起きた言語の移動や、神の外観の問題から、内面としての心と、外在として身体の関係について著作を残した。アウグスティヌスは、人間の使う「記号」(signa)をそれが運び持つ意味を抑圧する受動的な容器とし、バベルの塔の建設で経験した失敗にみられるように、人間の意思疎通は天使による完璧なコミュニケーションよ

り劣っていると考えた(二)。

著者は、アウグスティヌスにとつてのコミュニケーションを「文字より心」と要約し、文字に由来しながら文字を超越すべきだという立場として解説している。ある意味でいうと、アウグスティヌスが「メデイウム」という概念の発明者かもしれない。『キリスト教の教え』(De doctrina Christiana, 397)で使われた「道真」(means)ということばは、交通、運搬、意味の伝達を表す「メデイウム」・「メディア」にほぼ同じである(六九頁)。アウグスティヌスのコミュニケーション観と、それと密接するキリスト教の解釈学の伝統においては、政治と道徳の利害関係の絡みもあったという。解釈学にしばしば抑圧されていたユダヤ教系統の思想家のなかで、フロイトとデリダ、ラカンが、テキストが外面のものではないと考え、人間の内面は「心」ではなく、ことばそのものであると主張した。これらの主張は解釈学の権威に対する抵抗になった。

一七世紀、精神物理学の領域の発想から大いに啓発

され、近代の英語において新しい意味の「コミュニケーション」(communication)が誕生した。イギリス科学史のなかの中心的な人物であるフランシス・ベーコンや、ジョン・ウィルキンスによる著作で、光、声、熱、重力、煙といったものを介し、精神から精神への直接的な伝達が想像されたのである。例えば、ニュートンは、重力が磁力、光、熱と同じく、人間が感知できない流動体を通して動いて進むものと想定しており、この流動体を指す英語とラテン語の表記はいずれも「メデイウム」(medium)であった。

「コミュニケーション」という概念が物理の範疇から精神の事象に拡大していくなかで、ジョン・ロックの論説が決定的であったという。ロックの革新性は、人と人との間で観念(idea)が共有されることを、明確に「コミュニケーション」ということばをもって記述していたという点にある。著者は、ロックの『人間知性論』(二六八九)における精神と言語に関する記述を考察し、それをデカルト、アウグスティヌスとそれぞれ

れ比較している。ロックは、コミュニケーションを発言やレトリック、言説の一種ではなく、発言や言説が最終的に達成する理想的な境地だとしている。以上の見方を含めて、また、内的な世界と外的世界を区別するという点においても、ロックの立場はアウグスティヌスに近いように見える。

しかし、両者は全体の理論構築では異なっているという。アウグスティヌスは記号 (sign) を身体に近い存在として捉え、ロックは記号を私有財産としている。ロックは、記号と言語を先天的ではなく、知と観念 (ideas) の後に生まれたものとしている。個人主義を提唱する彼は、個人の内面に生まれた感覚と観念を歪曲しないように、言語と思想を正確に結合させるべきことを説いた。しかし、その結合の目的はまた、個人の社会的な連帯として位置づけられていた。「このように、ロックの言うコミュニケーションは、パラドックスの概念となった。彼は、言語と観念を結合させるという自由を主張した一方、(引用者注…他人からの)正

確な反応を期待していた」(八五頁)。著者は、ロックのコミュニケーション観は、「個」とプライベートを手に入れた人間がいかに共同体、共通性へ回帰するかという問題をめぐって、『統治一論』といった私有財産に関する理論を穴埋めしようとしたのではないかと論じた。

以上、早期キリストの伝統から一七世紀の物理学、ジョン・ロックにいたるまでのコミュニケーションという概念の変化、とくに、このなかに表された記号と身体の関係が深掘りされた。第二章の最後では、以上の思想の流れを継承した時期として、新しいメディア技術が現れた黎明期の一九世紀前後に着目している。

この時期、死者や亡霊といった遠い存在との接触や、目に見えないメディアを介するコミュニケーションが、「心霊磁力」(ニニ)を使う催眠術、心霊主義、エーテルの研究において模索されていた。ここで著者は、人間の想像力と技術がいかに相互影響していたかという視点を持っており、これらの事情を非科学的な迷信とすることは避けられた。

例えば、「心霊磁力」を通して他の人と一体となって魂を融合する催眠術は、欧米の文学と文芸に多大な影響を与えており、この流れで生まれた大衆操作と説得の理念は、二〇世紀の群集心理とマス・コミュニケーションの研究領域にも影を落とした^(二三)。心霊主義者が亡霊と対話する際に、亡霊にアルファベット表を朗読してアルファベットを選ばせたことは、電信の仕組みと似ており、当時は「亡霊電信」(spirit telegraph)と呼ばれていた。ジェームズ・C・マクスウェル (James Clerk Maxwell) が説いたエーテルの存在は実証されていない。しかし、メディア無しのコミュニケーションへの想像が無線技術の応用に刺激を与えており、B B Cの創始者・ジョン・リース (John Reith) も、無線技術はそれが作動するエーテルに依存していると述べたことがある(二〇三頁)。

著者は、一九世紀前後の心霊主義者と無線技術の関係者は、言語などの媒介を介さない共通理解を夢見ていたが、他の存在がもつ視点は我々から隠されており、

他の存在は我々と異なるものである以上、コミュニケーションの難問を解決することはできないとした(一〇八頁)。

第三章 精神に対するより強固な視座―ヘーゲル、マルクス、キルケゴール

心霊主義者より精神に対してさらに強固な視座(robust vision)を提供したのは、ヘーゲルと、その後継者であるマルクスとキルケゴールであった。著者は、三者の学説は大いに異なっていたが、彼らがいずれも近代のコミュニケーションの問題に直面した最初の思想家たちであったと認めている。三者は、削減できない身体化の問題(the irreducibility of embodiment)、自己の二重性、意味のもつ公共性という立場において、心霊主義の伝統と対立していた。

『精神現象学』は、ヘーゲルのコミュニケーション論として広く捉えるべきである。第一に、『精神現象学』は、形式から分離できる内容が存在しないと主張する、

形式に関する論法である。第二次大戦後のコミュニケーション理論の表現でいえば、チャネルから離れたメッセージはないということになる。第二に、コミュニケーションは客観でありながら主観である。コミュニケーションの課題は、主観を他の事物と融合するのではなく、主観に客観という可能性を含める歴史的な関係を構築することである。

著者は、ヘーゲルのいう「精神」(Geist)をヘーゲルのコミュニケーション論の中心的な概念としている。「精神」は、同時に起こる多様性と自己意識の統一性をもたらず体験で、そこで自我と他者が同じくこの客観的で公共的な「精神」から自身を発見する。「私は、すなわち私たちであり、私たちは、すなわち私である(引用者訳)」（一一三頁）という体験といえる。このように、「精神」は公共的であり、形式から離れられないという意味において物質的(material)でもある。

アングロアメリカンの文化では、精神の客観性を語ることは、しばしばファシストのような悪者として扱

われるが、ヘーゲルのいう「精神」は幽霊のような観念ではなく、人間の共同的な「文化」を含蓄していたという。美術、音楽の作品に作者の意志が宿っているかどうかということについて、ヘーゲルは思考の手がかりを私たちに与えてくれた。

ヘーゲルとくらべ、マルクスは主観と客観からなる不愉快な関係 とくに、その関係を代表する貨幣というメディアに着目していたという。マルクスにとつて貨幣は、交換のメディアであるだけではなく、人間の労働を表象して、人間そのものを疎外するメディアでもある。

貨幣と市場が象徴するコミュニケーションのモデルは、散布である。労働者とその労働の対象の間にあつた対話の関係が、貨幣の存在によって抽象化され、拡大され、散布という形に歪められたのである。マルクスにとつてのコミュニケーションの失敗は、意味の食い違いではなく、象徴的かつ物質的な資源の不適當な配給であつた。資本主義の物質と文化に対して、この

病理診断では暴力革命の処方箋を用意していた。

著者は、マルクスは対話のモデルに専念しすぎて、公共的な生活と個人の生活で起きた発話や、その中斷に対しては、応答が不足していたとする。後のマルクス主義の政治においても、コミュニケーションについての見方は以下の二つの枠から脱却していない。一つは、全員対全員のユートピア的な対話である。第二に、階級意識あるいはプロ・パガンダのもとで行う少数による多数に対する操作である。

キルケゴールは、コミュニケーションを哲学的な問題として捉えた第一人者であった(二二八頁)。悲劇的な要素が足りないマルクスのコミュニケーション観とは対照的に、キルケゴールは人間の疎外が不可避だと認めており、コミュニケーションにおいて、いかに戦略的な誤読をするかということに関心を示した。

ハイデガーと同じく、キルケゴールもコミュニケーションはメッセージの交換ではなく、何かを表現しながら隠匿することとして認識していた。そこで表現さ

れた内容よりは、隠匿された内容のほうが重要である。例えば、キルケゴールの『おそれとおののき』(Frygog *Beven*, 1843) のなかで、アブラハムがかかった「神に誘発された失語症」という例を挙げている。キルケゴールが描いたアブラハムは、息子のイサクを殺すように神に命じられたが、イサクの神への信仰が失われな

いように、神の意志を他の人に隠蔽していた。ここで、イサクを殺すという行動において、アブラハムとイサクの私的な意味・関係と、アブラハムと神の公的な意味・関係が衝突していた、と著者は解説している。二つの意味が調和できないなかで、神の命令に従ったアブラハムにとっては、彼と「コミュニケーションを取ろうとすることは、彼をアブラハムらしくない存在にすることを強いる」(二三三頁)。この場合、コミュニケーションを取るという行為は、理解を促すどころか、真実の破壊者になる。

著者は、キルケゴールが一八八五年に幕を閉じた彼の人生において、誕生期の電子メディアがもたらした

社会の転倒関係を察していたという。個人と現実世界が変位的な関係にあり、位相が違ふというように考えたためだろうが、公共的な関係と権力の問題を軽んじる傾向があつた（二二八頁）。

第四章 生者の幻、死者との対話

第四章と第五章において、十九世紀前後に出現した新しいメディアにあつた「媒介されたコミュニケーション」(mediated communication)の側面が発掘されている。この時期に人間の接触に起きた画期的な転換は、「記録」と「伝達」を軸として展開した。これは、英語によるメディアの命名法からはつきり見て取れる。電信(telegraph)、電話(telephone)、テレビ(television)、精神感応(telepathy)のよつな「tele」がつく語彙は文字、音、図像、精神に起きた新しい距離のスケールを提示した。一方、電信(telegraph)、写真(photograph)、蓄音機(phonograph)、脳波記録(electroencephalography)といった「-graphy」が付く語彙は、文字、図像、音、

脳波の新しい記入方法を意味する。

著者はハロルド・イニスの『帝国とコミュニケーション』(Empire and communications, 1950)を参照しながらも、イニスが用いる「傾向性」(bias)ではなく、「縛り」(binding)という表現を使い、「伝達」と「記録」のそれぞれの特徴を「空間縛り」(space binding)と「時間縛り」(time binding)として表現している。「紙と電気のような空間縛りのメディアは、持ち運びやすく、遠距離にある異なる場所を空間的に接合する。彫像や建築のような時間縛りのメディアは、持続的で、長い時間のなかの異なる瞬間を束ねる」(二二八頁)。

著者は、イニスの理論からさらに一步踏み込んでいく。人間の営みと精神の関係からメディアを考えるにあたって、一九世紀の新しいメディアは生死の制限と距離の制限を破壊したと論説している。伝達のメディアは、「距離の克服」(overcoming of distance)であり、人間の生身を記録し幻を生み出す記録のメディアは、「死の克服」(overcoming of death)である。

以下、記録のメディアで起きた死者との対話は第四章、遠距離のメディアにおける真実性の追求は第五章で取り扱われている。まず第四章では、小見出しである「死者とのコミュニケーションとしての解釈学」「エマソン―ヤマアラシの接触不可能性」「蓄音機と歪められた対話」「バートルビー―散布としての写字生」「配達不能の郵便物」に示されるように、著者は一八、一九世紀の英米の文芸、新聞、郵便に関する資料を横断的に使っている。そのなかの中心的な問題は、以下のように要約できる。

記録メディアがもつ複製の能力は、散布というコミュニケーションのモデルに合致しているが、記録メディアに生身の人間の要素を見つけた十九世紀の人々は、人間の幻との「対話」を望んでいた。すなわち、記録メディアにおいて「散布」と「対話」が衝突しており、記録のメディアを使う人々は、パラドックスのようなメディアの状況に置かれ、コミュニケーションの挫折に常に晒されていたのである。

しかし、この新しいメディアがもたらす状況に悲観的になったり、憤りを感じたりする必要はないと著者は説いている。「実は、すべての媒介されたコミュニケーションは、死者とのコミュニケーションである」(一四二頁)。例えば、すでにばらばらになったテキストを解読する解釈学 (hermeneutics) の学問分野において、作者と疎遠な関係にある解読者が、いくらテキストを解釈しても、回答がこない一方通行が続いている。しかし、この対話のないコミュニケーションは、死者のためではなく、我々自身のために行われるのである(一五二頁)。歴史のテキストを解釈学的に捉える姿勢は、アメリカの詩人・エマソン (Ralph Waldo Emerson) の思想にも見られるという。エマソンは生者との間の本当の触れ合いを信じていない一方、生者と死者の接点を死者への追悼と追憶のなかに見出した。

音を記録できるが対話はできないという点で非難を浴びた蓄音機のように、ハーマン・メルヴィルの小説が描いた写字生であるバートルビーという人物は、臆

写した文章の暗唱を拒否し、回答・対話しない記録行為である書写 (writing) そのものの象徴になった。「ぼく、そうしない方がいいのですが」(I prefer not to) (二四) と言いつつ、もつとも人間らしくないと思われたバートルビーは、フーコーやデリダといったポスト構造主義の思想家の間で、対話を起こそうとした小説の叙述者に抵抗する反骨的な人物として描かれた。ここで著者は、対話を強いる権力の濫用に注意しつつ、対話のモデルがすべての道徳の経験に適用できるとはかぎらないと論じている(一六〇頁)。

「配達不能の郵便物」(Dead Letters)という節では、第二章のアウグステイヌスとロックによって提起された身体Ⅱ形式と精神Ⅱ意味の関係が、プライベートと公共性というテーマにより深められている。一八世紀の郵便物は、郵便局長に読まれたり新聞に報道されたりする葉書きのようなものであったが、記録メディアの登場によって、プライベートの観念が意識され、郵便の検閲と配達も変貌した。著者は、一旦記録された

ものの私的狀態を保つことの難しさを指摘し、公共の場とプライベートの領域が浸透し合う状況のなかで、郵便と新聞に変革を起こそうとした言動を分析した。

第五章 確実なつながりの追求、それとも隔たりへの架橋?

第五章では、遠距離のコミュニケーションが確実なつながりをもたらすのかどうかという問題をめぐって、一九世紀の観念論主義者と心霊現象研究の思想を分析した後、公共的なメディアとしての電話とラジオ放送に絡み合った文化的な現象を考察している。

第四章と同じく、第五章においても引き続き、メディアと身体化 (embodiment) の問題を主な分析の軸としている。「遠方にいる生者とのコミュニケーションと死者とのコミュニケーションとを区別することは困難である」(二四九頁)として、一九世紀の「記録」のメディアと「伝達」のメディアに表された身体化の問題は近いものだと捉えている。

著者はまず、一九世紀後半の物理学のメタファーを用いて、コミュニケーションの相手の身体に接近していたら、その接触は確実のものだろうか、という疑問を読者に投げかけている^(二五)。この問題について、観念論者のジョサイヤ・ロイス (Josiah Royce) とブラッドリー (F.H. Bradley) の著作において、コミュニケーションする人間はしばしば、身体が部屋に閉じ込められ、外部と隔離されているものとして描かれていた。

この部屋にいる個人は、合図や声といった記号の送信と受信はできるが、受け取った記号が受け手自身の妄想なのか、それとも外部による明確な意図なのかは判断できない。このように、個人と個人の間でのコミュニケーションはほぼ不可能であると考えられ、独我論のスタンスは避けられなかったという。

同じく観念論者であるチャールズ・クーリーも、思想や精神、人間が使う記号が、身体から分離したものと捉えていた。一方、クーリーは個人以上に、社会のなかのコミュニケーションを考えた。社会にとって

そもそも一種の聾啞者のような人間が、メディアがもたらしたコミュニケーションの革新により、正常な状態にもどれると考えていた。メディアを社会変化の推進力としたこの視座は、イニスやマクルーハンらトロント学派に先立つものであり、一九世紀末の変化するコミュニケーションの状況に合致していたという。

草創期の「伝達」のメディアである電話とラジオは、つながりよりは隔たりを生み出していたと著者は見ている。隔たりに注目する視点はやや奇抜に見えるが、メディアの効用を過度に強調する技術決定論を避けて、コミュニケーションの問題について思索し格闘した人々の精神世界に光を当てようとしているのだろう。

まず、対面の会話を一変させた電話には、不可解な一面があった。顔を合わせない電話には、互いのアイデンティティを交渉するための礼儀作法が生み出された。また、初期のラジオと同じく電話も、強いられた出会いや、家庭に入ったおかしな声、黒い穴に落ちたような終わり方、といった批判を受けていた。カフカ

の小説『隣人』では電話の盗み聞きを恐れ偏執症になった人、『城』では素性の知らない電話の相手の真意を疑う人が、それぞれ描かれている。メッセージを隠そうとする官僚主義と、官僚主義の意志を忖度する現代人とのコミュニケーションのパターンについて、カフカの小説のなかの電話がその代表的な例になったという。「内面での反映と外部からのメッセージを区別できない場合、意味の解読者は独自にコミュニケーションの閉鎖的な回路を耐えなければならない。このような無力は、心理学では偏執症と言われているが、社会的にみれば「マス・コミュニケーション」と呼ぶべきであろう」(二〇一頁)とあるように、電話という公共的なメディアに現れた種々の失調が、マス・コミュニケーションの状況を予言していた。

確実さの追求は、一九三〇年代のアメリカのラジオ放送にも見られる。ラジオで行われる放送(broadcasting)という行為は、一九三四年のアメリカの通信法(The Communications Act of 1934)において、

私的に管理され、公的に受け取るという特徴が認められており、鉄道や電話、電信といった「一般運搬人」(common carrier)と区別されていた。放送と「一般運搬人」はそれぞれ散布と対話のモデルの象徴でもあったという。

しかし、アメリカでは放送の商業化にともない大衆社会での受容が図られ、補償的な対話主義がラジオ放送という散布のモデルにおいて発生した。放送の脱身体化と遠距離によって生じた各種のギャップを乗り越えるため、多くの方策が練られた。例えば、アナウンサーがおしゃべりの口調を採用し、見えない聴衆からメッセージを受け取るかのような対話的な表現形式が工夫され、ファンクラブや読者からの手紙などのテクニクも使われた。一九二〇年代に同時配信を意味するようになった「ライブ」(live)という言葉は、死と距離を越える連絡の力という意味合いが込められていた。一九五〇年代に「マス・コミュニケーション」という概念が提起された当初、マスコミに対面の対話が

不足しているという性格がしばしば強調されたが、一九三〇年代頃の聴衆による想像の共同体の構築は看過された傾向があるという。

第六章 機械、動物、異星人―交流不可能の地平

一九世紀に起きたコミュニケーションの種々のトラブルを第四章と第五章で叙述してから、第六章では二〇世紀における交流が不可能に近い存在を対象としている。一九世紀から増幅された技術の力によって、人間が発した記号が生身と切り離され、人間はメディアとして外面化された (externalized into media forms)。二〇世紀のコミュニケーションの挑戦は、人間の定義が揺らぐなかで、人間の姿をしていない存在である機械や動物、異星人との触れ合いとなった。

まず、近代の思想と文化につきまとった人間と機械の関係は、デカルトとパスカルの時代に遡れるという。デカルトにとって、人間の理性は、天から付与された神聖なもので、他の種や自動機械 (autonaton) とは共

有しない。宇宙に対する人間の共感を抑制したデカルトの理論は、アニミズムとアリストテレス主義に対する反抗にはなっていたが、動物に対する罪のない虐殺や酷使を容認する思想的な土台になりかねないという。デカルトの対照となっているのは、初期のコンピュータの開発に携わったアラン・チューリングである。チューリング・テストと呼ばれる実験では、被験者がタイプされた対話のみを通して、対話する相手の性別を判定するように要求された。容貌や喋り方、触覚といった生身の要素がタイプライターによって抹消されたので、ジェンダーの判定は身体の特徴によるのではなく、ディスプレイだけに依拠することとなった。とくに、対話の相手が機械に置き換えられた場合、被験者は機械を識別することはできるのだろうか。チューリングが想定した「スマート・マシン」が有する知性は、身体とは関係のない知性である。しかし、人間の知性は実生活の行動のためのものであり、死や性といった肉身の有限性にも制限されるものあることを踏ま

えれば、チューリングの理論は、社会生活と政治生活を疎かにしたものであったという。

動物や異星人とのコミュニケーションの場合、著者は動物や異星人がもつ人間らしい知性を信じ込み、彼らとむりやりに交流しようとするという感情移入を懸念している。トーマス崇拜のように、動物は古くから人間の自己認識の鏡である。一九世紀以降、動物同士の交流やそれに用いられる記号を検証する動物行動学が發展して、コミュニケーションの概念は言語に頼らない形まで広められていった。しかし、以下のような注意点もあるという。

動物行動学は、種を越えるコミュニケーションの物語への想像力を与えるが、人間との共同生活に欠けている動物との間の交流からは、結局のところ人間が満足するような成果を得られないだろう。とくにこの交流の目標を、具体的なある課題を解決するというように設定する場合、一層緊急性に欠けているし、歴史上にも一度も実現されなかった。数千年の過酷な征服と、

それに比べて短い歴史しか持たない家庭内でのペットイングは、統治と自己の感情の投写という二つのモデルをもつてしか説明できない。

自己の感情の投写は、異星人と交流したいという熱望にも見られる。一九五〇年代に始まった国際的な科学組織である地球外知的生命体探索（SETI）による早期のレポートにおいて、科学が宇宙における普遍的な価値観と想定されていた。宇宙からのメッセージを探索していた当時の科学者たちは、メッセージの送り手は必ず科学者のような存在であると信じており、地球外の文明の助けで人類の絶滅が避けられるだろうと楽観的であった。

しかし、SETIによる探索作業は、心霊主義者たちが試みた死者との対話と同じく難航した。例えば、地球から三八光年離れた恒星のアークトゥルス付近から送信してきたメッセージをキャッチするには、少なくとも三八年の時間がかかるのである。「地球外生命体とのコミュニケーションは、どの状況よりも、遠距

離のコミュニケーションは「過去」から来ているということを説明できる」(二四八頁)。

また、無限に近い情報の海から意味のある方向に、記号を組み合わせるといふ作業は、理論的かつ数字的にほぼ達成が不可能であるが、SETIは「議論の余地をもたない人工的な信号の識別」といふ戦略を取った。すなわち、メッセージたる一連の信号は、自然物や偶然の発生とは異なるものでなければならぬ。しかし、メッセージの受信と送信において、地球外生命体のメッセージは、はたして人類の感覚で識別できるものなのだろうか。また、彼らに送信した高尚だと思われる地球の文明は、地球の大衆文化よりも彼らに好まれるのだろうか。

これらの質問を読者に投げかけることで、著者はSETIの努力が不思議なほどの片思いに走っていたという一面を提示した。かつては、このような情熱に満ちた好奇心は、ロマン主義者によって日暮れや鳥の鳴き声、雲の構造といった地球上の大自然に投げかけら

れたが、相手の反応を求める姿勢は取らなかつた。人間をすべての尺度にする独我論を避けるには、不可解な他者という客観的事実に向き合わなければならぬ。

三 本書の評価

本書『空に向かって語るーコミュニケーションの精神史』のメディア研究やコミュニケーション理論として評価すべきは、まず、人文学のメディア研究の可能性を広めたという点にあると考えられる。本書は、社会心理学によるマス・コミュニケーション研究と大きく異なり、また、研究方法を部分的に共有する文化研究とも研究のスタンスが異なっている。二〇世紀のコミュニケーションの課題が「存在という巨大なネットワーク (great network of being) において、いかに人間の立ち位置を確定するかに変わった」とあるように(二二九頁)、本書は、コミュニケーションを人間の存在にかかわる問題として捉えようとして、コミュニケーション

ヨンにかかわる近代以降の時代精神を俯瞰している。

この意味で、本書のいう「コミュニケーションの精神史」は、技術決定論と対照的に理解する可能性がある。技術の進歩があつても、コミュニケーションに起きる障害はなぜ消し去れなかつたのか、という疑問を繰り返して問う本書は、多くの科学・技術の言説を分析した。トロント学派のメディア理論から継承した部分も大きいだろうが、それよりは、技術によつて変えられた人間の存在の表し方と、技術を生み出して技術の力を増幅させた人間の欲望・精神との絡み合いが重点とされていた。この視座において技術決定論をほとんど乗り越えられたといえる。

コミュニケーションで起きる障害が人間の運命であるというような、やや悲観的なニュアンスも見受けられる。ただ、著者は、ヘーゲルのような間主観的なコミュニケーション観に近い立場に立ち、コミュニケーションに對するよりよい理解へと読者を導いた。すなわち、コミュニケーションを双方の交流という狭い意

味から解放し、倫理的かつ政治的に捉える必要がある。コミュニケーションの実践は、人間自身に関する知を深めることであり、自己の存在と間主観的な関係を構築する他者と、いかに共存するかということも含意するのである。例えば、子どもや動物、大自然を大事に思う責任は、彼らには我々が認める知性があるからというわけではなく、彼らには、我々とながる血縁関係や共存してきた歴史があるためである。

また本書は、個人単位やミクロな視点が多かつたコミュニケーション理論に、「対話 (dialogue)」と「散布 (dissemination)」と二つのモデルを提示し、マクロな視点を補足した。このモデルは欧米の道徳観とキリスト教文化に大きく依拠したものであろうが、フロイト『文明への不満』(Civilization and Its Discontent, 1929)に對する本書の評価に示されるように(二一九頁)、一対一の関係に限定される対話主義のエロスと、より大きな視野をもつてより弱い感情的な繋がりをもつ文明は、常に拮抗関係にあった。本書は、一対一の対話主

義より、文明のためのコミュニケーションの倫理観を選んだといえよう^(六)。コミュニケーションについて考えることは、一つのメディアの効果を考えるだけではなく、人間の立ち位置ないし文明の存続など、大きく考えるべきだと本書は説いた。

「散布」のモデルを強調した狙いは、コミュニケーションが相互的であるべきだという神話を破ろうとする点にあったと考えられる。『パイドロス』でのソクラテスの「理想は、栄光に満ちたと同時に厳格なものである」(四五頁)。著者は、隔たりがなく、双方が融合するようなコミュニケーションの理想は必ずしも積極的だとは限らず、即座のフィードバックを要求するような対話が凶暴的になりうることを警戒している。そこで、「対話」の行き過ぎを「散布」のモデルで補うことで、「散布」と「対話」のバランスの取れた普遍的かつ具体的なコミュニケーションを目指すという倫理が本書では提示された。

最後に、「コミュニケーション」と「マス・コミュニ

ケーション」の関係を再考する点において、本書は新しい視点を提供してくれた。まず、「コミュニケーション」が一对一の活動になりうると思像されるようになったのは、媒介されたコミュニケーションの影響の下に置かれてからのことである。(引用者注：コミュニケーションよりは)マス・コミュニケーションが先に来る」

(六頁)という主張に、読者は「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」の転倒を感じ取るだろうが、ここで問題とされているのはコミュニケーションが発生したという事実の順番ではなく、コミュニケーションに対する人間の意識が生まれた順番である。「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」をつなげて考えるための手がかりとして、また、本書を一貫した主題の一つとして、何かの媒介を通して姿を現すという意味での「身体化」(embodiment)の問題が提示されていた。著者は、「コミュニケーションの精神史は、近代生活のなかのさまざまなエロスの記録である」と要約しており、「エロス」については、第

一章で提示されたプラトンによる見解に従い、身体と身体が接触していない力の場 (force fields) と定義している(二八〇頁)。一方、著者にとつての「身体化」の問題は、ソクラテスの時代においてすでに存在していた古くからの哲学の問題でもある。記号を残せば、その記号が書写であれ、コンピュータにタイプされた活字であれ、記号を残した側の身体との関係が問い続けられた。しかも、ソクラテスによる書写への危惧と、一九世紀の人々が電話やラジオに感じとつた驚異とは、どれほど異なっていたのだろうか。それと同じように、二一世紀の人々が接しているインターネットや人工知能は、どれほど新しい「身体化」の問題だろうか。このように本書では、いわゆる新しいメディアの登場によつて、記号と人間の肉身の関係に潜んでいる矛盾や力関係が顕在化したと捉えて、「コミュニケーション」と「マス・コミュニケーション」を同じ土俵において考察することを試みた。

以上、メディア研究、コミュニケーション理論にお

いて本書を評価すべく三点にまとめた。資料と論証が充実しており、倫理的、哲学的な啓発を多く読み取れる本書の趣旨は、一本の書評においてすべて開示することはほぼ不可能なほどである。その点において、各分野から、また一般書としても専門書としても、読み応えのある一冊に違いないと言える。

研究対象の全体的な時空のスケールの広さや、論述の取捨選択にはさらなる検討の必要もあるだろう。文学と哲学の領域で深められた蓄積に基づき、コミュニケーションの精神史を構築した本書は、とくに論述の運び方において、詳細な考証を重視する歴史研究との差異が明らかである。また、本書のさらなる評価については、西洋思想史・哲学史における本書の位置づけが関わるだろうし、キリスト教文化から影響を受けた欧米発のメディア理論への評価や^(二七)、著者が提示したコミュニケーションのモデルと類似した思想や文化現象がほかの文化圏においていかなる様相を呈していたのかといった問題を視野に入れるべきだと考える。

これらの課題はすでに本稿で論じられる範囲を越えているので、本書に対するさらなる討論と批評に期待したい。

(一) 鶴見俊介「コミュニケーション史へのおぼえがき」江藤文夫、鶴見俊輔、山本明編『講座・コミュニケーション2 コミュニケーション史』研究社出版、一九七三年、一七頁。

(二) 一九七二年頃に出版されたコミュニケーション論の専門書には、『講座・コミュニケーション』(全六巻、研究出版社、一九七二―一九七三年)シリーズのほか、山田宗睦『コミュニケーションの文明』(田畑書店、一九七二年)、慶応大学新聞研究所『コミュニケーションの理論―インターデイシプリナリー・アプローチ』(慶應通信、一九七二年)、東京大学新聞研究所『コミュニケーション―行動の様式』(東京大学出版会、一九七四年)が挙げられる。

(三) 白戸健一郎「日記性の復権―鶴見俊輔「ジャーナリズムの思想」『メディア史研究』第五二号、五七―六五頁を参照。

(四) 山腰修三「理論研究の歩みと課題」マス・コミュニケーション理論とメディア理論の展開をめぐって『マス・コミュニケーション研究』第一〇〇号、三二―二頁、メディア史研究部会「メディア史研究の歩みと課題」『マス・コミュニケーション研究』第一〇〇号、四九―六一頁、津田止太郎「マス・コミュニケーション学会のメディア化：学会名称変更過程における『学術メディアの論理』」『メディア研究』第一〇二号、一三四―四頁などを参照。

(五) 本書の書名は評者による訳である。サブタイトルの「a history of the idea

of communication」は、直訳すれば「コミュニケーションの思想史」になると思われるが、本書では知識のほか、大衆文化や技術的な言説の考察も多く行われた。また、「対話」と「散布」のコミュニケーションのモデルが本書の史的な叙述において一貫しているため、「コミュニケーションの精神史」と訳するのが適切だと考える。

(六) 著者はここで、レイモンド・ウィリアムズによるコミュニケーションの概念を参照している。「コミュニケーション」ということばによって、思想、情報、態度などが伝えられ、受けとられる諸組織、機構や形式のことを指そうと思つ(レイモンド・ウィリアムズ著、立原宏要訳『コミュニケーション』合同出版、一九六九年、一七頁)。

(七) プラトン著、藤沢令夫訳『パイドロス』岩波書店、一九六七年、一三六―一三七頁。

(八) 新約聖書の四福音書(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)はいエスの生涯と教説を述べているが、そのうち前三者は記述内容、語句、構成に共通するところが多い。前三者を並べて観察・研究することがしばしば行われたので、共観福音書の名が与えられた(ブリタニカ国際大百科事典)などを参照。

(九) (一)で著者は「broadcast」に種まきと「放送」という二つの意味をもたせたと考えられる。

(一〇) 『新約聖書』米田標準訳日本語口語訳対照』日本聖書協会、一九五七年、五一―九頁。

(一一) (一)で考察された聖書ウレリウス・アウグスティヌスの著作として『キリスト教の教え(De Doctrina Christiana)』と『神の国(City of God)』などが挙げられる。著者によれば、キリスト教のなかで、ことばを小さな意思疎通のできる天使によるコミュニケーションは、迅速で、間違いないといわれていたといふ。

(一二) コンペ「心靈磁力」(animal magnetism)と翻訳することあたっては、

著者の解説を参考した。本書によれば、「animal magnetism」の言い方は、物理の磁力 (physical magnetism) を対照としていこう。吉見俊哉『声』の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史」(河出書房、二〇二二年) では、「動物磁力」と直訳されている。

(一四) John Durham Peters, "Satan and savior: Mass communication in progressive thought," *Critical Studies in Media Communication*, Volume 6, 1989, pp. 247-263.

(一五) マクスウェルの日本語訳は、ハーマン・メルヴィル作、坂下昇訳『幽霊船 他二篇』岩波書店、一九七九年、一八二頁を参照。

(一六) マクスウェル (James Clerk Maxwell) が一九世紀後半に行った実験がここで挙げられている。二つのレンズに圧力をかけ、レンズを通した光の距離を測るという実験において、マクスウェルは「巨大な圧力をかけていても、接触はなかった」と判断した。

(一七) 本書ではフロイト『文明への不満』に対して、文明は、各個人、家族、国家、人種を結合しなければならぬが、確実な民主主義のエロスは、そもそも不可能であり、それを表現するためには他の人への抑圧が起りかねないと解説している。

(一八) 同じくキリスト教文化から影響を受けたメディア理論家として、マクルーハンとオングも挙げられる。例えば、マクルーハンは『メディア論』において、記号・言語を瞬時に翻訳するコンピューターが、世界共通の理解と統一の成就した「聖霊降臨」の状況を技術によって約束してくれると論じたことがある。本書の著者から見れば、これもまた完璧な意味論的な伝達を追求するコミュニケーション観になりかねないと映ることだろう。